

# 民主化闘争情報

No. 886  
2013年10月3日  
発行 日本鉄道労働組合連合会  
(JR連合)

一連のJR北海道の不祥事・事故に関して、様々なメディアがJR北海道の歪な労使関係を取り上げているが、今度は『週刊文春』が、JR総連・JR北海道労組(北鉄労)に関する記事を掲載した。

## JR北海道社員の8割以上が「革マル系労組」所属 —『週刊文春』がJR北海道労組の安全問題に係る姿勢を糾弾—

10月3日発売の『週刊文春』(10月10日号)は「新聞・テレビが報じない事故頻発の深層『JR北海道社員の8割以上が革マル系労組所属』」と題する記事で、一連のJR北海道の不祥事・事故の背後要因として、革マル派による浸透が指摘されるJR総連傘下の北鉄労の安全問題に対する姿勢について、JR連合が再三指摘してきた「アルコール検知器検査」拒否問題および「平和共存否定」問題に触れ、警鐘を鳴らしている。

「悪質性を非常に感じる。組織全体として安全管理への姿勢や職務規律のあり方に問題があるのではないか」列車火災に脱線事故、267カ所にも及ぶレール異常の放置と不祥事頻発のJR北海道。その企業体質を厳しく批判したのが、菅義偉官房長官だった。

「あの菅長官の発言はJR北海道の異常な労使関係を念頭に置いたもの。JR北海道への特別保安監査(立ち入り検査)の監査員を9人から倍以上の20人に増強したのも、菅長官の指示。この際、組織の“膿”を徹底的に出そうということなのでしょう」(政府関係者)。(中略)

「JR北海道の異常な企業体質が生まれた背景の一つに労使関係がある。一例をあげれば、安全に関わることで、労組の合意なしに義務化できなかったアル検(アルコール検査)問題があります」こう語るのは、JR北海道の現役中堅社員だ。「2008年、会社はアルコール検知器を導入し、全乗務員に乗務前に各自で検査するよう呼びかけた。ところが組合は『アル検は強制ではない』として組織的に検査を拒否。09年には国交省の立ち入り検査で、札幌車掌所の12人の車掌が導入時から一貫してアル検を拒否していることが発覚しました。そして、その全員が北鉄労の組合員でした」

北鉄労(北海道旅客鉄道労働組合)は、全社員約7千人のうち、管理職を除く84%が加入するJR北海道の第一組合だ。「その後も会社は組合との対立を恐れて、アル検の義務化はせず、11年10月には新聞に『義務化していないのはJR各社の中でも北海道だけ』と叩かれました。しかしそれでも会社は『乗務員の自主性を重んじる。検知器の使用を強制することは検討していない』などと回答しています」(同前)実は同じ年の5月、JR北海道は石勝線で特急列車が脱線した後、火災が発生、乗客39人が病院に搬送される事故を起こしている。(中略)国交省から事業改善命令を受けたにもかかわらず、アル検は拒否されていたのだ。そして事故の4ヶ月後には、中島尚俊社長が「『お客様の安全を最優先にする』ということを常に考える社員になっていただきたい」と遺書を残して自殺する。

「アル検が、組合の合意を得て義務化されたのは、昨年のことでした。JR北海道では、会社と組合の力関係が逆転している。これで職場規律が乱れないわけがありません」(同前)

もう一つ、JR北海道で指摘される、会社と現場の意思疎通の不全や技術の継承ができていないなどの社内風土の問題。ここにも、北鉄労が関係している。(中略)「彼ら(北鉄労)は組合員に、我々他労組の人間とは『職場で会っても挨拶するな、談笑するな』と指導。勤務明けに一緒に飲みに行くことも、休みに遊ぶことも禁じました。北鉄労の若い組合員がウチの組合員と飲みに行ったことが発覚しようものなら、組合から徹底的に糾弾されたのです」そして北鉄労は「組織防衛」のためなら組合員の結婚式まで妨害するという。

安全問題で胸襟を開いた議論のできる健全な労使関係を構築しよう!